消費の嵐と聖なるロシア

中山　弘正

《消費の嵐》

2年ぶりのモスクワの初秋。ソ連邦崩壊、「市場移行」10 年を期して、若い専門家達と『現代ロシア経済論』（岩波書店）を上梓したばかりである。2年前、連続爆破事件のため入りそこなったマネージナヤ広場（クレムリン西わき）の地下商店街には目を疑った。地下3階までピカピカの高級商店。ティファニーなども無論入っている。横浜のみなとみらい地区とそっくり。いわゆる西側の高級商品は（お金さえあれば）何でも買える。

有名なアルバート街の外れのホテルに泊まったので、すぐ近くの「第7の大陸」という24 時間営業のチェーンのスーパーに入って、これまた仰天した。沢山の種類のハム、ソーセージは無論、乳製品、魚、冷凍食品、調理済みの惣菜とともに、日本の寿司のパックまでも並んでいる。かつては、外国人専用のドルショップ「ベリョースカ（白樺）」でしか買えなかった生活用品も所狭しと並んでいる。もちろん、モスクワ市全体のベリョースカ化は、今に始まったことではなく、ペレストロイカ期に遡り、ソ連邦崩壊でどっと広がった。今回の驚きはその質量の顕著な飛躍ぶりである。庶民の衣服の質が全体に著しく向上し、テレビを含め激しい広告合戦が消費をあおっている。道を歩きながらの携帯電話、という若者は（幸い）未だそれほど多くはないが、超ミニやロング、車内でのお化粧…と生活様相のグローバル化は著しい。

ソ連邦期に各区ごとにはあったコルホーズ自由市場（ルイノック。近郊の集団農場や個人副業の農産物売場）も、周辺に新たな沢山のブティックや小間物店の街路が発達している。モスクワ大学への地下鉄出口なども、ちょっとした商店街である。個人商店は名札を出し、12桁の納税番号を表示している。市民・市場社会への秩序化ともいうのであろう。

こうしたモスクワの消費生活は、単に西側に追いついたとか同じ、という以上の熱気、或いは迫力、いや、何かすさまじい執念をさえ感じさせる。ソビエト時代に押え込まれ、抑圧されていた消費への欲望は解き放たれ、今や嵐となってモスクワの街を吹きまくっている、とでもいおうか。軍需用工作機を作っていた工場が、今は「ほら、家具のお店ですよ。」先掲の本で私は「軍産複合体の民需転換」の問題も書いているのであるが、民需品を作ることさえ止めて、直接商店になるケースもあるとは思いもよらなかった。長い間、「軍事に動員された経済」、他の領域は「その宵で生きている」と改革派の論客が嘆いていたものだが、今や、ついに消費の欲望は解き放たれ、嵐となったのである。

《集団農場の再訪》

1977年度に交換留学で10ヶ月ほど家族でソ連邦に滞在した。集団農場の研究で来たのに、学者には会えても農場を見せてもらえない。岡田裕之氏（法政大学名誉教授）が郊外バス終点が国営農場、と発見され、一緒にいってみた。そのときは監視塔だと思い驚いたガラス窓のある給水塔を、グリム童話にちなんでラプンツェルの塔と名付けたりした（拙著『ソビエト農業事情』NHK ブックス、1981 年）。4半世紀ぶりにその農場を再訪した。あの時もすでに歴史の遺物であったその塔は今も未だ残っていたが、当時の国営農場は、今は一つの株式会社（ただし株式は非公開）に転換していた。当時の女性の所長は替り、今は男性の若いやり手の社長。乳製品加工部門が増えたが、労働者は当時の約 1000 人が今 700 人（いずれも半数が女性であるが、「当時も今も本当の『労働』者は女性だけョ」と活発そうな女性理事が微笑する）、牝牛も 3500 頭から 2800 頭に減っていたが、平均賃金は 200 ドルとドルで言われたのも新しいロシアらしい。とはいえ、農場の基本構造は余り変わっていないところを見ると、やはり『ロシア　擬似資本主義の構造』（岩波書店

刊の拙著、1993年）は今もか、とも思う。

通りかかった労働者風の男性が実はこの奥のダーチャ（別荘）の施工主の一人で、「見に来ないか。」あの時、岡田氏とすぐ追い返された道を今度はどんどん進み、農場も出て森を抜け、林を抜け別荘地に着く。日本の二世帯住宅の 2 倍以上もあろうかという別荘が沢山建てられつつあった。

《聖なるロシア》

たとえわずかでも、郊外の畑や牧草地、森に出るとやはりホッとする。この広さ。ここにロシアを感じる。パステルナークの家（ペレデェルキノ）もそのようなホッとした場所であった。緑の畑、森、そしてロシア正教のあの金色のネギ坊主屋根と独特の十字架。

モスクワ都心のキリスト救世主教会堂は、2年前にもう入れたが、マネージナヤ広場から赤の広場に入るところにまで正教の大小会堂が復活していたのは驚きであった。90 年代の後半に正教は国家との癒着を強めつつ、その力を伸ばしたが、消費の嵐の中で人々の心は「聖なるロシア」に向かっているだろうか。ブルガーコフが『巨匠とマルガリータ』で、モスクワに降り立たせた悪魔は、まだ始まったばかりの共産主義をあざ笑ったが、この消費の嵐はひょっとしてその仕業ではなかろうか。「キリストの荒野での試みは、この世の栄華と交換に悪魔を拝めというものでしたね。」ソ連邦期からの筋金入りのプロテスタントの友人が、今やモスクワ市北部に自分達の手で建て上げつつある巨大な「ゴルゴタ教会」を背景にそう語る。解き放たれた人間の欲望、消費の嵐と「聖なるロシア」「聖貧こそ魂の富」というロシアのせめぎ合い、そこには闘いが、今日も、ある。（モスクワにて）

（なかやま　ひろまさ　所員・経済学部教授）

追記：2001年11月6日『朝日新聞』（夕刊）
テーブルトーク欄にも、同趣旨で登場。